

金融経済概観

金融市場動向

—平成6年3月—

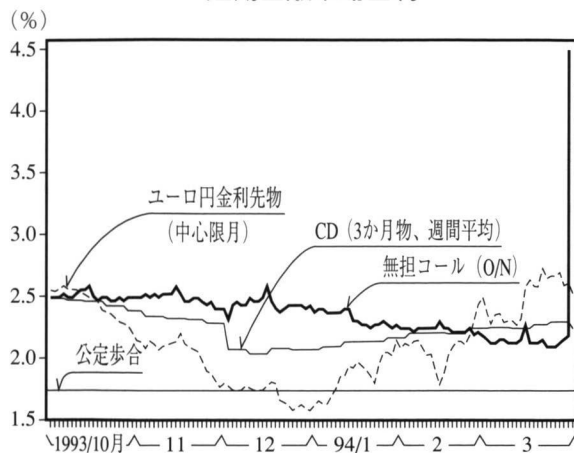
(平成6年4月15日)

1. 短期金融市場

3月中の無担コール・オーバーナイト物レートは下旬にかけて僅かながらも低下し、既往最低水準で推移した（月末は期末要因によるはね上がりが見られた）。CD（譲渡性預金）3か月物レートも、下旬にやや上昇したものの、月中を通じて低水準で推移した。また、ユーロ円金利先物（金利ベース）については中旬以降上昇した（なお、月央に限月交替＜中心限月6年9月限→12月限＞）。

コール・プロパー手形市場資金平均残高（全国）は45兆3,725億円と前月（45兆1,015億円）を上回った。

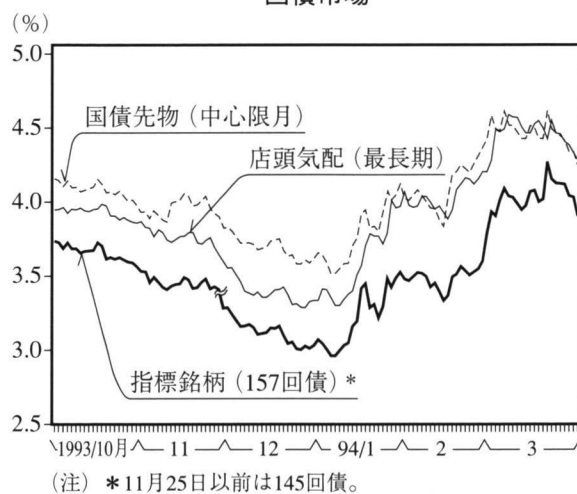
短期金融市場金利



2. 資本市場

3月の長期国債利回り（157回債）は、米
国長期金利が上昇する中で中旬にかけて上昇したが、下旬には為替円高や株価下落等を背景にやや低下し、3.900%で越月した（前月末3.605%、国債先物中心限月は4.241%＜前月末4.349%＞）。国債の出来高をみると、現物（店頭取引）は前月を上回った一方、先物は前月を下回った。

既発債市場利回り
—国債市場—



株式市況（日経平均株価）は、中旬から上昇し、16日に年初来高値（20,677円）を記録したが、月央以降は法人の決算対策売りがみ

られたこと等から下落し、19,111円で越月した（前月末比△886円）。また、株式出来高（東証第一部月中1営業日平均）は4.16億株と前月（4.28億株）を若干下回った。

起債動向をみると、長期国債は、10年物（価格競争入札分）についてはクーポン・レートが市場実勢比低めの水準に設定されたこと等から盛り上がりのない入札となった（3月2日入札分は募入平均利回り4.479%、応募倍率2.31倍）。また、6年物は概ね順調な入札となった（3月10日入札分は募入平均利回り3.827%、応募倍率2.39倍）。短期国債は6か月物、3か月物ともやや低調な入札結果となった（3月4日入札分＜6か月物＞は募入平均利回り2.143%、応募倍率1.85倍、3月16日入札分＜3か月物＞は募入平均利回り2.222%、応募倍率1.41倍）。



3月の国内公募普通社債は軟調な債券相場を背景に1,950億円の発行にとどまった（2月4,250億円）。また、国内エクイティ市場での発

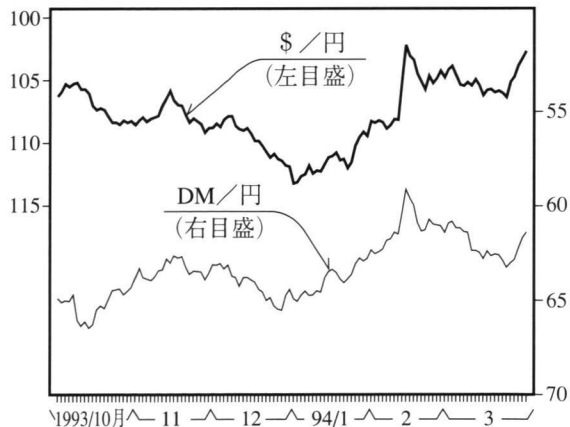
行（3月払込み分、増資を除く）は前月を若干上回った（2月2,760億円→3月3,100億円）。

3. 外国為替市場

3月の円の対米ドル直物相場（終値）は、横這い圏内で推移した後、月末にかけては日米通商問題を巡る思惑や米国債券・株式市況下落等を背景にややドル安となり、結局102.80円で越月した（前月末104.30円）。また、円の対マルク相場（東京市場、終値）は、61.45円で越月した（前月末61.07円）。

なお、東京外国為替市場の出来高（円対米ドル、直物および先物・スワップ計、1営業日平均）は163.5億ドルと、前月（180.1億ドル）を下回った。

外国為替市場

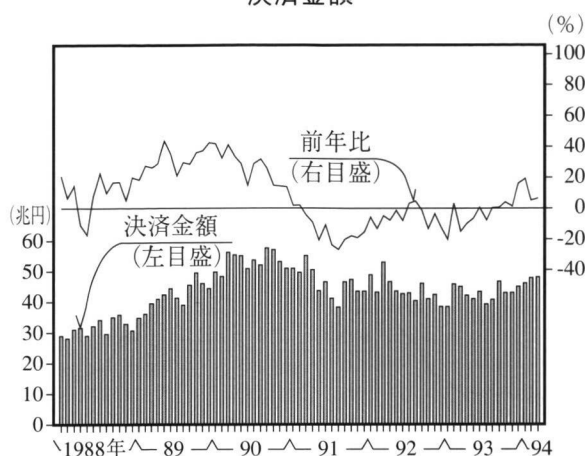


4. 決 済

3月の資金決済の金額（1営業日平均）をみると、手形交換高（東京）は前年同月を下回った（前年比△6.4%）一方、全銀システム取扱高（前年比+10.3%）、外為円決済交

換高（同+12.5％）はそれぞれ前年同月を上回った。また、国債の決済金額（1営業日平均）については移転登録（前年比△4.5％）、振込口座振替（同△2.6％）ともに前年同月を下回った。

決済金額



(注) 1. 1営業日平均。
2. 手形交換高（東京）、全銀システム取扱高、外為円決済交換高の合計額。

5. 資金需給、金融調節

3月の資金需給をみると、銀行券要因が2,946億円の余剰（前年同月5,279億円の余剰）となったのに加え、財政等要因も、公共事業費等の年度末払いが多額に上ったため、3兆2,388億円の余剰（同4兆544億円の余剰）となった。こうしたことから全体では3兆5,334億円の余剰（同4兆5,823億円の余剰）となった。

こうした状況下、日本銀行は買入手形の期日落ちを進めること等により資金を吸収した。

4月の資金需給（国債発行織り込み前）を窺うと、銀行券要因については、月中1兆2,000億円程度の不足（前年同月1兆6,377億円の不

足）となる見通しである一方、財政等要因は、公共事業費の支払い等を中心に6兆9,000億円程度の余剰（同8兆9,813億円の余剰）となる見通しであり、全体では5兆7,000億円程度の資金余剰（同7兆3,436億円の余剰）と予想される。

6. マネーサプライ、銀行券、預金・貸出

2月のM₂+CD平残前年比伸び率は+1.6％と前月比横這いとなった。通貨種類別にみると、準通貨の伸び率が低下した一方、預金通貨の伸び率は上昇した。また、広義流動性の平残前年比伸び率は+3.0％と前月比横這いとなった。

3月の銀行券平残前年比は+4.9％と前月を上回った。

3月中の金融機関の預金・貸出動向をみると、預金平残（実質預金+CD、都銀、地銀、地銀Ⅱ）前年比は+1.9％と、前月に比べ0.3ポイント伸び率を高めた。一方、総貸出平残（都銀、長信、信託、地銀、地銀Ⅱ）前年比は+0.5％と5か月連続で既往ボトムの水準にとどまった。

7. 貸出・預金金利

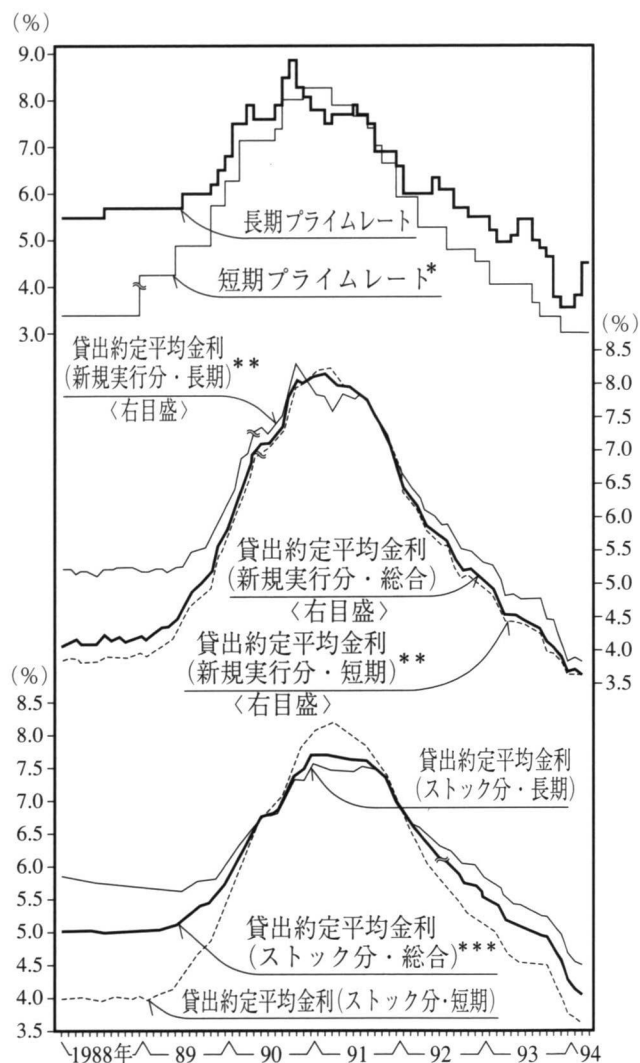
2月中の貸出約定平均金利（全国銀行）をみると、新規実行分については、短期（前月比△0.089％）、長期（同△0.059％）、総合（同△0.071％）ともに小幅低下し、それぞれ既往ボトムを更新した（総合：1月3.653％→2月3.582％）。

また、ストック分についても、短期、長期、当

座貸越、総合ともに引き続き低下傾向を持続し（短期：前月比 $\Delta 0.128\%$ 、長期：同 $\Delta 0.078\%$ 、当座貸越：同 $\Delta 0.141\%$ 、総合：同 $\Delta 0.100\%$ ）、既往ボトムを更新した（総合：1月 4.331% →2月 4.231% ）。

この間、2月の定期預金金利（自由金利分、3か月以上6か月未満の全銀受入金利平均）は前月比上昇した（1月 1.904% →2月 1.977% ）。

貸出金利（全国銀行）



(注) * 1989年1月以降は都市銀行の中で最も多くの数の銀行が採用した金利。

** 1990年4月以降は地方銀行Ⅱを含む。

*** 1992年4月以降は当座貸越を含む。

(調査統計局)